

うとしたのか。それは、彼らが神学的著作において合理的に説かれたテキストに対する好みを持っており、その好みは、アウグスティヌスやボエティウスから得られる論理学の知識によって刺激されたのではないであろうか。そのようなテキストへの好みは、中世初期に特有のものであり、そこに中世初期の独自性を見ることもできるであろう。

その独自性は、論理学に関する知識の深まりとともに、強化されていったように思われる。アルクィヌスの時代、論理学に関する最も重要な著作は、偽アウグスティヌスの『十の範疇』であった。11世紀初めまでに、『範疇論』も『命題論』もボエティウスによる翻訳を用いて研究されるようになり、『十の範疇』への関心は、薄れていく。そしてアリストテレスの学説の理解に注意が集中されていくようになった。しかし論理学を神学に適用するということは、13世紀になると「はたして論理学をどこまで神学に適用できるのか」という問題を引き起こすことになると思われる。

このような意味において、「論理学が学問の中心となっていたのはなぜか」という問題は、中世哲学史を理解するうえで、きわめて大きな意味を持っているのではないであろうか。では中世初期の思想家たちは、神学的著作において合理的に説かれたテキストに対する好みをなぜ持っていたのか。いつか考えてみたい問題である。

意見

宮本 久雄

「古代末期からカロリング・ルネッサンスへ」という歴史的テーマの背後には副題「知の断絶か連続か」が伏在しており、時代の上限をボエティウスにとりそこから下限をカロリング王朝の成立・展開期にとって実に精緻な提題の解釈がなされた。その場合一体ここで問われる知とはどのような理性的・ロゴスの営みののだろうかということが問題になる。もしこの知の性格を自然科学的知の意味にとれば、前述のテーマにあって知は歴史と共に進歩してゆく理性的営為ということになり、その結果知の断絶よりも連続の方が発展として積極的に理解されよう。さて哲学的知の場合そうした理解でよいのだろうか。

また、テーマの知の意味が、従来中世哲学史的に知られていない研究動向の交流や

影響関係あるいはその基盤となる中世史の資料の発掘状況と研究のゆきづまり突破や進展の意味で理解されうる。それは一面中世哲学の歴史的理解にとって多大の寄与をなすであろうし、断絶されていた資料や歴史交流の闇を照らし出す意味をもつ。その意味でやはりそこでは連続的側面が積極的に理解されるであろう。さて哲学的知の場合そうした理解ですまされるのであろうか。

哲学が自然科学的な進歩や資料の発見をも含めた文化的交流史に還元できないとすれば、その根本的特徴はどこに求められるのだろうか。それは歴史と自然をまたぐわれわれの生の根拠アルケーに対する問いの質と深さに、ではなかろうか。

その意味ではギリシア哲学とヘブライ思潮がはじめて出くわして新たに根拠をめぐる問いが苛烈に問われたギリシア・ラテン教父時代はまさに知の断絶と連続、カオス化とロゴス化の時であり、人間の生の一切がそこにかけられた問いの時代であったことは容易に窺えるといえよう。すなわち、その時代には、神のアルケー（三一論、神人論、神秘）、人間のアルケー（自由意志、歴史など）をめぐる根本的問いが深められたのであった。しかしカロリング朝に至る、古代末期からの知の探究にあっては、どのような問いが提起され、それが人間の生と理性をどれほどまでに絶望にまき込んでしかもやがて新たな知の地平を披いたのか、が非常に見えにくいのである。

今回の野町、清水両先生の御発題が未だ開拓されていない時代に関わる前代末聞の探究と解明であり、非常に教えられること多としたが、質問者には他方で依然この断絶と連続の地殻変動をひきおこした知の問いとは何であったのか、が問いとして残っている。

意見

ラテン文化圏における東方的知

秋山 学

討議の終了間際に意外にも発言を求められ、拙見を述べる機会が巡ってきた、その際に強調したことは、古代末期までの地中海世界における「知」が、ある意味で「ギリシア語に則した十全な知識」を意味するものであり、哲学的レベルであれ教義神学のレベルであれ、このギリシア的知の普遍的浸透性の有無が「古代末期」と「カロリング期」とを明確に区別する指標になるのではないか、という点である。